広島大学大学院人間社会科学研究科紀要「教育学研究」第５号　2024　232－241

事例の科学としてのヴァン＝マーネンの解釈学的現象学的方法論の展開

―「現象学を遂行すること」の検討を中心として ―

藤　原　由　佳

（2024年10月９日受理）

Max van Manen's Methodology of Hermeneutic Phenomenology and its Development As the Science of Examples：Focusing on Doing phenomenology

Yuka Fujiwara

Abstract: The purpose of this study is to clarify that van Manen's (Max van Manen, 1942-) hermeneutic phenomenological methodology has been developed as a “science of examples” through “doing phenomenology.” By reviewing his research development, it is possible to understand his phenomenological work and the perspective of "science" that van Manen attempts to provide us with the basis of phenomenological educational research methodology. And then, it is also possible to understand how the implications for a phenomenological educational approach to the work in education.

Key words: Methodology of Hermeneutic Phenomenology, Max van Manen, Doing Phenomenology, Science of Examples
キーワード：解釈学的現象学的方法論，マックス・ヴァン＝マーネン，現象学を遂行すること，事例の科学

Ⅰ．研究の目的と問題設定

本研究の目的は，ヴァン＝マーネン（Max van Manen, 1942- ）の解釈学的現象学的研究方法論が,「現象学を遂行すること（doing phenomenology)」[1)] を通して「事例の科学（science of examples)」として展開されてきたことを明らかにすることである。この展開をおさえることで，ヴァン＝マーネンが現象学的教育学研究の方法論を土台に描こうとしている「科学」的営みと「科学」観に論究するとともに，教育という営みへの現象学的教育学のアプローチの示唆するものを提起する。

教育事象や教育実践研究へ，現象学の基本的態度と諸成果をもって創造的に適用するという試みが現象学的アプローチであるとして，現象学的教育学の知見が用いられ, 蓄積されてきている（田端2014, 79頁参照)。現象学的教育学者の中で,「生きられた経験」を直接記述する方法論に着目し，その方法論を現象学の初学者にとってもアクセス可能なものとして体系化したことで注目されてきたのがカナダ・アルバータ大学の名誉教授であるヴァン＝マーネンである。ヴァン＝マーネンの教育学研究は，後述する研究方法論に関する研究だけではなく,「教育的タクト」や「教育的思慮深さ」,「省察」の構造に関する研究が日本の教育学研究においても蓄積されてきた（例えば，中野2002，宮原2014)。また，ヴァン＝マーネンの教育学研究は，北米のカリキュラム研究という文脈において生起し，北米のカリキュラム研究を先導する形で，今日の現象学

本論文は，査読付き論文である。

的教育学の研究とそれに導かれる教育実践の探究につながっていることにも注目する必要がある（藤原2024参照）。こうしたヴァン＝マーネンの教育学研究の中でも，一定の注目がなされつつも，「事例の科学」として提起されるヴァン＝マーネンの解釈学的現象学的方法論に着目することで，教育の理論と実践との関係にアプローチしようとするのが本研究である。

日本におけるヴァン＝マーネンの方法論に言及する先行研究には，井谷（2013）と村井（2000；2022）を挙げることができる。井谷（2013）は，個別の生きられた経験に対する省察が即興の技量としてのタクトの啓発にいかに寄与するのかという問題設定において，生の状況を取りまく複雑性と偶然性に満ちた「ありうること（possibility）」というキーワードに着目する。井谷（2013）では，現象学的な探究プロセスには生きられた経験（Erlebnis; lived experience）をめぐる書くことと読むことを通した省察があり，それが生きられた経験の意味と本質に近づこうとする現象学的方法論の特徴だと捉えられている。次に村井（2000）は，van Manen（1990）と本人へのインタビューを参照先とし，ヴァン＝マーネン自身の生きられた経験の探究の出発点に「親であること（parenting）」への問いがあることを明らかにしている。そこでは，現象学的な方法論における研究方法の手続き的側面について，ヴァン＝マーネンが示している「親であること（parenting）」の本質へのアプローチを例にし，現象学的問いの定式化やデータ収集，テーマ分析，現象学的記述が言及される。一方，村井（2022）では，ヴァン＝マーネンの生きられた経験の現象学的探究のスタンスの変化に留意し，彼の理論の変化を押さえる必要があることが指摘されている（177頁参照）。以上の先行研究においては，ヴァン＝マーネンの現象学的教育学研究を捉えるための中心軸が，書くことと読むことを通じた生きられた経験の省察や「親であること（parenting）」への関心であると捉えられてきた。

しかしながら，これらの先行研究では，教育実践が文字通り「書くこと」へと矮小化して捉えられているという課題と，その課題を乗り越えるための「事例の科学」というヴァン＝マーネンの方法論の捉え方が等閑視されている。そこで本研究では，これまでの現象学的教育学研究とヴァン＝マーネンの教育学研究の蓄積をふまえつつも，これまでに取り上げられてこなかった文献や資料を用いながら上記の課題に論究する。具体的には，次の二点に取り組む。

一点目に，ヴァン＝マーネンは「書くこと」自体への省察を研究活動の軸にしていることに加えて，「書き直すこと」への省察も解釈学的現象学的研究の過程，つまり，「現象学を遂行すること」として位置づけていることである。ここでは，経験を直接言葉にして書いていくことと，書いたものをさらに書き直していくことを「現象学を遂行すること」として捉える必要がある。そのために，ヴァン＝マーネンが教鞭を執っていたカナダ・アルバータ大学の大学院における演習で用いていたハンドアウトである van Manen（1984）の文献資料を中心に「現象学を遂行すること」の営みを検討する。なお，このハンドアウトは2023年９月に筆者がアルバータ大学 North Campus の Rutherford Library にて収集した[2)]。

二点目に，現象学的記述を書き進めていく中で「事例（example）」を用いるということがヴァン＝マーネンの現象学的アプローチの一つとして示されているということである。その上で，実証的な論理の言葉に回収されない詩的・文学的な要素もある表現や逸話は，経験の本質に迫るための事例として現象学的記述において機能することが意図されている。この点については，ヴァン＝マーネンの息子で小児科医でもあるマイケル・ヴァン＝マーネン（Michael van Manen）との共著である論文を検討する（以下，本論文中のマックス・ヴァン＝マーネンはヴァン＝マーネン／van Manen, 息子のマイケル・ヴァン＝マーネンは M・ヴァン＝マーネンと表記し，文献表記は前者を van Manen/van Manen, M.，後者を van Manen, Mi. とする）。この共著論文は，村井（2022）においても「ヴァン＝マーネンの現象学的な位置づけ」（村井2022，７頁）を示すために論文の前半部については触れられているが，現象学をどのような「科学」として M・ヴァン＝マーネンとヴァン＝マーネンが構想しようとしているのかにまでは言及がなされていない。

この二点の課題に迫るために，まず，数ある現象学的なテクストの中でもヴァン＝マーネンの現象学的なテクストに関する認識は，ヨーロッパ大陸の哲学やオランダの「ユトレヒト学派」の現象学的教育学研究からの影響を受けていることを明らかにする。その上で，カナダへ移住後，北米の研究動向と融合する形で現象学的研究を展開していったヴァン＝マーネンの段階的な研究フェーズについて示す。次に，ヴァン＝マーネンは現象学的な方法論の構造の中で書くことと書き直すことの省察を「現象学を遂行すること」として位置づけ描き出していることを明らかにする。最後に，ヴァン＝マーネンの解釈学的現象学的方法論が「現象学を遂行すること」を通じた「事例の科学」としての研究として展開していることを描く。以上を通して，ヴァン＝マーネンの解釈学的現象学的な方法論に対する日本における先行研究の捉え直しを図るとともに，その意義と課題を述べる。

Ⅱ．ヴァン＝マーネンの研究活動の拡大：研究のモチーフと段階的フェーズ

1．ヴァン＝マーネンの研究のモチーフ：「ユトレヒト学派」の教育学の思想と文体の影響

M・ヴァン＝マーネンとヴァン＝マーネンが『質的医療研究（Qualitative Health Research）』に寄せた共著「現象学的研究と記述をすること」（van Manen, Mi., & van Manen, M., 2021）は，以下のような問題提起から出発する。すなわち，「心理学，教育学，看護学，医学のような分野にいる研究者にとって，もっとも現実の問題に直結するような現象学とは何なのだろうか。いくつかの現象学的研究は，人間存在を理解するために行われている他の研究より役立つのか。そのような現象学的研究は何になるのだろうか。」（van Manen, Mi., & van Manen, M., 2021, p. 1069）という問いである。こうした問いの立て方に，現象学という哲学的な思想や伝統の変遷，現象学の専門用語が教養のある読み手に開かれるのみではない，という彼らの問題提起が示されている。ならびに，現実に起こる個別の現象，実践の意味構造とその理解を図ってきた様々な専門領域における関心に応えてきた学問の一つが現象学であったと捉えるM・ヴァン＝マーネンらの現象学観を見ることができる。

この問題提起に応えるためにM・ヴァン＝マーネンらは，アメリカでフッサール研究をしていたコッケルマン（Kockelmans, J.J., 1923-2008）の現象学に関する多数の出版物の傾向についての以下の三つの分類を参照し，出版物の分析をしている（cf. van Manen, Mi., & van Manen, M., 2021, pp. 1069-1071）。中でも彼らが着目するのは，オランダ・ユトレヒト学派の現象学的教育学研究の蓄積である（cf. van Manen, Mi., & van Manen, M., 2021, pp. 1071-1073）。

現象学に関する出版物の第一の傾向としては，フッサールやハイデガー，サルトル，メルロ＝ポンティといった現象学の哲学的基礎や洞察を提供した創始者（originator）として著名な人物によって書かれた著作が挙げられる。彼らの著作は必ずしも初読容易に理解することできる文献とはいえない。それにも関わらず，現象学の創始者たちの書いた「還元」や「エポケー」，「カッコにいれる（bracketing）」，「生活世界（lifeworld）」，「現存在としての人間存在論」といった現象学の原初的な概念や思考形式の基礎となる記述の特徴は，現象学に関心のある読み手へ，彼ら／彼女らの哲学的意義が無尽蔵に表れるような基本的な洞察を提供し続けているという点にあるとM・ヴァン＝マーネンらは捉えている。

現象学に関する出版物の第二の傾向としては，解釈的で「メタ現象学（meta-phenomenology）」であるような出版物が挙げられる。この傾向に関わる出版物のスタイルは，例えば，技術的，歴史的，哲学的な現象学に関する問題に取り組み続けている学術的な出版物もあれば，解釈学的，批判的，哲学的な議論や他の哲学領域にいる学者の議論や立場，テーマ，関心事，理論，説明を提供するものだとされる。

現象学に関する出版物の第三の傾向としては，実際の実践（practice）や具体的な生活世界のトピックに関して現象学を「遂行する（do）」テクストが挙げられる。この傾向に関わる出版物のスタイルは，現象学の創始者たちの基礎的で理論的な記述と実践や日常生活のトピックを関連づけるような形で「現象学を遂行すること」というスタイルをもつ。この傾向における出版物は，経験の本来的な意味に対し，現象学について哲学することや釈義的な営みとは別のスタイルで，現象学的な問いに基づき「現象学を遂行すること」を示す事例としても位置づくものである。

この第三の傾向に位置づく出版物の意義について，M・ヴァン＝マーネンらは「人間存在の洞察へと現象学的洞察が進化することは，創造的で（original），根源的な（primary）現象学の仕事であると考えられる」（van Manen, Mi., & van Manen, M., 2021, p. 1071）と評価している。つまり，現象それ自体に対する直接記述（direct description）がめざされていたような第三の傾向に位置づく出版物こそ，現象学の仕事であるという意義が見出されているのである。このような評価を受ける一方で，実際のところ，日常の生活世界を現象学的に記述するという出版物は，生活世界から離れたレベルでの現象学を扱うような聖書解釈学的なテクストよりも稀なものであったことをM・ヴァン＝マーネンらは指摘している（cf. van Manen, Mi., & van Manen, M., 2021, p. 1071）。この整理によれば，このような稀なテクストを展開した第一人者たちは，臨床心理学者や精神科医，医学博士，教育学者といった専門家であり臨床家としても活躍した「ユトレヒト学派（the Utrecht School）」あるいは「オランダ学派（the Dutch School）」として知られている現象学者らであったことが示されている。

「ユトレヒト学派」という名称は，オランダ・ユトレヒト大学において「現象学的アプローチ」をとっていた研究者らの「学術共同体」を指す。第二次世界大戦後，ユトレヒト学派の学者間では「ヒューマニズム（humanism）」と「人格主義（personalism）」を鍵概念とし，様々な社会的な学問領域を統合していく動きが起こった（cf. Levering, B., & van Manen, M., 2002, p. 278）。とりわけ，その後教育学分野で活躍するランゲフェルト（Langeveld, M. J., 1905-1989）がその動きの中心となった。ランゲフェルトは，1946年に強い人文主義的な視点を持っているボイテンディク

（Buytendijk, F. J. J., 1887-1974）をユトレヒト大学に招聘した。ボイテンディクの「人間の行動を生物学・生理学的に観察する方法と，その行動の起こる具体的な状況から行動の意味を開示していく手法」が，ランゲフェルトの「子どもの人間学」の構想と結びつくようになる（奥井2017，76頁；浜口2021，58-59頁参照）。

ユトレヒト学派の教育学の領域では，1972年にランゲフェルトがユトレヒト大学を引退した後も，ランゲフェルトの後継者らによって現象学的研究活動が継続されている（cf. Levering, B., & van Manen, M., 2002, p.283；村井2003，444頁；奥井2017，76頁）。例えば，教育学的現象学の領域におけるユトレヒト学派第二世代であるベークマン（Beekman, A. J. T., 1926-2014）[3]は，ランゲフェルトの後継者であり，「現象学の民主化」をユトレヒト大学の学生と共に試みている（村井2008；2012）。1965年にユトレヒト大学教育学部に着任したベークマンは，従来のユトレヒト学派の研究者らの現象学的研究の姿勢を批判し，「エリートではない学者や教育学の初学者である学生にも現象学記述をある程度可能にすること」（村井2012，74頁）を意図し，「現象学の民主化」を目指した。学生への教育方法的な側面では，1974年から1986年までユトレヒト大学の講座で「現象学を遂行すること（doing phenomenology）」と題した講義を行い，学生自身に生きられた経験の記述をすることを求め，学生が現象学的な態度を身に付けることを目指していた（村井2012，74-75頁参照）。

ベークマンの退任後，ユトレヒト大学では，レーベリング（Levering, B.）が，そして北米ではヴァン・マーネンが，ユトレヒト学派の第三世代としてユトレヒト学派の思想と伝統を継承しながらランゲフェルトの著作の英訳を進め，現象学的教育学研究の展開，ならびに現象学的教育学の民主化や国際化に貢献してきた（村井2003，441-445頁参照）。

２．ヴァン＝マーネンの解釈学的現象学的研究の段階的フェーズ

ヴァン＝マーネンにおいて現象学的教育学研究[4]とは，「解釈学的または解釈的 - 記述的現象学（hermeneutic or interpretive - descriptive phenomenology）」（van Manen, 2014, p.26）である。現象学的教育学研究は，生活世界や生きられた経験を対象にし，その意味を明らかにしようとする研究である。ヴァン＝マーネンの現象学的教育学研究では，生きられた経験の意味を探究する軸となる方法は，常に「書く活動」（ヴァン＝マーネン2011, 26頁）である。生きられた経験の意味をテクスト表現に変換する「書く活動」と「生きられた経験の本質とは何か？それはどのようなものか？」と問うことを通して，生きられた経験の本質に近づくことがヴァン＝マーネンの捉える研究の目的である。

ヴァン＝マーネンは，自身が「解釈学的現象学」の方法論に根差そうとしたルーツに，ドイツの精神科学的教育学とオランダの現象学的教育学のアプローチがあったと言及している（ヴァン＝マーネン2011，１頁参照）。ヴァン＝マーネンは，学生時代にオランダで学んだ現象学的教育学や「単なる哲学的な視点の名前ではなく，私たちが生きるときの人生の意味や，個人的な行動や判断の責任の本質を問うことを目的にする起点（the source）」（van Manen, 2014，p.13）となる現象学に魅了されながら研究を始めた。その後の北米への移住以降に本格化するヴァン＝マーネンの研究は，次のような六つのフェーズで捉えることができる[5]。

第一フェーズにおいて，ヴァン＝マーネンは，教育研究に対する理論的な視点と方法に関して，方法論主導で実用的な北米の研究アプローチと解釈的な西ヨーロッパの伝統を融合させる形で現象学的な研究モデルの土台形成に取り組んだ。このフェーズにおける主著は，“Researching Lived Experience：Human Science for an Action-Sensitive Pedagogy”（1990）が挙げられる。

第二フェーズにおいては，第一フェーズから発展的に取り組まれていた教育的な「関係性」の概念に注目するようになる。なおこのフェーズにて，ヴァン＝マーネンはランゲフェルト，ボルノー（Bollnow, O. F. 1903-1991），ボイテンディクなどの著名なドイツ人やオランダ人学者の1950年から1970年までの古典的な教育学の著作の翻訳と出版に取り組んだ。そのことを通して，「教育的反省（pedagogical reflections）」，「教育的思慮深さ（pedagogical thoughtfulness）」と「教育的タクト（pedagogical tact）」の概念を精緻化していった。このフェーズにおける主著は，“The Tact of Teaching: The Meaning of Pedagogical Thoughtfulness”(1991) や第一フェーズで執筆した“Researching Lived Experience”の再編集が挙げられる。

第三フェーズおいては，秘密と認識の両方が，理論的にも経験的にもアイデンティティや自己意識と関連していることや，書くことの過程を通じたアイデンティティと内省の関係についての関心から，子どもの幼少期の秘密と認識の経験を対象にした研究に取り組んだ。このフェーズにおける主著は，“Childhood’s Secrets: Intimacy, Privacy, and Self Reconsidered” (1996) が挙げられる。

第四フェーズにおいては，研究の当初から解釈的探究の本来的特徴として重要視していた「書くこと」の批判的な検討に取り組む。その中で，教師や学生の学

びにおいても経験的で解釈的な記述に取り組む重要性を提起する。また，研究プロジェクトの一環で香港大学へ訪問し，ライティング・ワークショップの活動への参加をきっかけに，オンラインによるコミュニケーションの問題に関心を持つようになる。このフェーズにおける主著は，“Writing in the Dark” (2002) がある。

第五フェーズにおいて，「書くこと」という経験そのものをよりよく理解するための一環としてオンライン記述の実践に取り組む。対面式セミナーとオンラインセミナーの体験の質の比較を行うために，当時ヴァン＝マーネンの助手であったアダムズ（Adams, C.）とともに，世界十数か国から大学院生や大学教員を招いて，オンライン国際セミナーを実験的かつ精力的に主催したこのフェーズにおける主要な論文は，アダムズとの共著である The Phenomenology of Space of Writing Online (2009) が挙げられる。

第六フェーズにおいて，ヴァン＝マーネンは，オンライン環境下の対人関係やオンライン上での読み書きを通じた応答，そして教えると学ぶの関係に関する現象へと関心を抱く。それは，ヴァーチャルな空間で行われるやり取りが，人間関係の希薄化や活動の疎外を促進していると捉えることにはとどまるものではなかった。むしろ「オンラインセミナーの環境において読み書きをすることは，いかに他者（私たちが知らない人）との親密さ（closeness）を育むのだろうか」，「画面上の言葉を単に書いたり読んだりすることを通して，オンライン上の教師 - 生徒の関係，あるいは生徒 - 生徒の関係を育むことはいかにして可能なのか」，「オンライン上での読み書きはいかに私たちの興味を起こさせる主題へと親近感を高めることができるだろうか」という問いかけのような，オンラインにおける教育的関係のあり方を見つめる取り組みとして研究が展開された。このフェーズにおける主要な論文は，The Pedagogy of Momus Technologies：Facebook, Privacy, and Online Intimacy (2008) が挙げられる。

ヴァン＝マーネンの段階的な研究フェーズを概観すると，第一フェーズにて現象学的教育学の方法論モデルの形成を意図した出版物を始まりとしながら，古典的な現象学的教育学者の出版物との対話，現象学的教育学における鍵概念の精緻化，子どもの経験に着目した研究，「書くこと」への省察といった多岐にわたる研究活動が伺える。一方で，多方面の研究活動を行ってきたヴァン＝マーネンの研究活動において，現象学的な研究へ向かう姿勢の一貫性やその研究軸となるものを見出そうとするならば，ヴァン＝マーネンの研究方法論に関する議論の古くて新しい問題となる「現象学を遂行すること（doing phenomenology）」の初期構想と近年の議論に迫る必要がある。

Ⅲ．ヴァン＝マーネンの方法論的構造における「現象学を遂行すること」の位置づけ

1．「現象学を遂行すること」に向かう問い

ヴァン＝マーネンの「現象学を遂行すること」についての方法論に関する思索は，第一フェーズにて書籍として広く認知される以前から構想されていた。その構想を，アルバータ大学の大学院生向けの演習「教育学の理論化（Pedagogical Theorizing）」でハンドアウトとして使用していた資料 ‘Doing’ Phenomenological Research and Writing: An Introduction (1984) に見出すことができる。

同演習は次の三つの問いに基づきながら進められる。三つの問いとは，「現象学とは何か？」，「現象学的な研究はどのように教育学的な能力へ貢献しうるのか？」，そして「現象学的な記述には何が含まれるのか？」である。特に van Manen (1984) では三つ目の問いが中心的に考察されている。ヴァン＝マーネンは，演習の受講生にも書くことの実践に取り組むことを求め，受講生が生きられた経験や日々の生活の経験としての生活世界の意味構造に対する気づきを言葉にしていく記述練習に取り組むよう促した（cf. van Manen, 1984, p. ii）。

一つ目の問い「現象学とは何か」に対してヴァン＝マーネンは，「現象学は生活世界の研究である」（van Manen, 1984, p. 1）と述べる。というのも，概念化，分類，理論化される前の日常的な経験を対象にすれば，「このような経験はどのようなものなのか？」を問い続けることを通して，現象学的研究は日常的な経験の本質や意味を深く理解することに目的がおかれる。ゆえにヴァン＝マーネンは，現象学的研究に取り組むことを適切に言い表すならば，「思慮深さ（thoughtfulness）に関する注意深い実践である」（van Manen, 1984, p. 1）と特徴づける。現象学に定位するということは，日常的な生活，ありふれた日常にこそ関心をむけることになる。耳を傾け，気遣いをする，つまり生きるということ自体に対して目を向けることが現象学において重視されるゆえんである。

二つ目の問い「現象学的な研究はどのように教育学的な能力へ貢献しうるのか？」に対しては，以下のように述べられている。「教育者として研究へ取り組むことの現象学的な関心は，つまるところ日常における実践的な関心事（concerns）それ自体に形を与えることである。（中略－引用者）つまり，例えば教育に関するありふれた日常の実践のような未知の意味（strange sense）の中で，現象学的研究の理論に基づく実践は，思慮深さの世話人（ministering）である。現象学的教育学的研究は，教育それ自体が実践的でタ

クト豊かであるという目的を果たすような同様の注意深い思慮深さを啓発する」(van Manen, 1984, p. 1)。現象学的研究が「思慮深さ」に関する実践であるのならば，現象学的理論に基づく現象学的教育学もまた同様の構造をもちうる。したがって，教育者として教育の日常的な実践に対し応答する場合，現象学的教育学的理論の視点は，教育自体に内包される実践的な意味の豊かさを明るみに出すための注意深く思慮深い態度を促すのである。

三つ目の「現象学的な記述には何が含まれるのか？」に対してヴァン＝マーネンでは，記述の活動自体を詩的な活動であり，詩的なプロジェクトであると位置づけている(cf. van Manen, 1984, p. 2)。ヴァン＝マーネンは，「詩的」な現象学的研究は，ある体験の本質や性質を適切な言葉で言い表していく中で，言語的描写のなかの「存在論的核心にあるものを発見すること」(van Manen, 1984, p. 2) がその特徴であると述べる。

２．現象学的な研究活動における方法論的構造

ヴァン＝マーネンは，現象学的研究活動をすすめるための「弁証法的に（dialectically）関与する」相互作用として，次の四つの方法論的構造の次元を示している（cf. van Manen, 1984, p. 2)。なおこの四つの現象学的研究の方法論的構造の次元には順序性はなく，むしろ，ある意味ではすべての局面に同時に取り組むことが想定されている。

a. 切実に関心をもち，私たちを世界に投げ入れる現象に目をむけること
b. 経験を概念化するというよりも，むしろそれ自体を生きるように経験を調査すること
c. 現象を特徴づける本質的なテーマを省察すること
d. 書くことや書き直すことのアート(art)を通じて，現象を記述していくこと

a についてまとめるならば，「生きられた経験の本質に立ち返る」(van Manen, 1984, p. 3) ということである。例えば，ヴァン＝マーネンは自身が関心を持つ「子育て（parenting)」の経験を例に挙げている（cf. van Manen, 1984, p. 6)。ヴァン＝マーネンは「子育て」に対して，以下のような自問的問いから出発する。すなわち，「私が関心を持っているのは，母性的育児（mothering）なのか，父性的育児（fathering）なのか？」，「教師が親代わり（親の立場で）として機能するという意味で，教えることはどのように子育てに似ているのか？」，「子どもに対するどのような種類のケアの提供（care-giving）が子育てになるのか？」，「里親は，この意味において『両親』なのか？」，「養子縁組での両親や子どものケアを引き受ける人の[育てる]義務の遂行機能についてはどう考えるか？」，「すべての（生物学的な）親たちが必ずしも，世界において特別な存在様式としての『子育て(parenting)』とは何か，ということを知る必要はないということを許容するべきか？」(van Manen, 1984, p. 6）といった問いである。これらは，ヴァン＝マーネンの「子育て」経験に対する切実な関心から成る問いである。問いは，ある経験やテーマに調査者が目を向ける機会を十分に持つための契機となる以上に，「そもそも問いを可能にしているものに深い関心（inter-esse：あること，何かのただ中に立つこと）を見出すこと」(van Manen, 1984, p. 8）が重要であり，単に経験を思い出すための問いでは不充分であるとされる。したがって，「問いを『生きる』こと」でむしろその問いに生かされていることに気づいたり，その問いに基づいた現象学的記述は読者が書き手と同じような経験の本質への問いに引き込むことが重視される（cf. van Manen, 1984, p. 8)。というのも，問うことは関心を向けたり，経験を省察したりする契機となるが，具体的に経験が何から構成されているかについては問うだけでは明らかにならないためである。ゆえに，「その経験の本質的な側面，それを生きぬいたときの経験の意味構造が呼び戻されるような方法で，並びに，その経験の解釈可能性という意味で，大体のところでの人間の経験として記述を認識できるような方法で経験を思い起こす」(van Manen, 1984, p. 7）ために調査（investigation）が進められる必要がある。

b については，現象学的研究を行う上での「経験に基づいた調査」ということになる。そこでは，調査対象である現象についてより深く理解する方法を見つけるために「生きられた経験の範囲の吟味や，発見された資料，ひいては現象の本質をより深く理解しうる方向へ結実したかもしれない資料（material）を徹底的に調査すること」(van Manen, 1984, p. 12）になる。現象学的研究における資料（material）は，経験を理解するための「解釈的な素材（interpretive material)」(van Manen, 1984, p. 12）を必要とする。例えば，自分の個人的な経験，関連用語の語源，慣用句や表現，他人の経験，伝記あるいは再構成されたライフストーリー，芸術的・文化的資料に含まれる経験に基づいた記述などである。

ヴァン＝マーネンは資料の収集において，次の二つの基本的な方向性に研究者は方向づけられると整理している。第一に，現象学的研究では研究者自身が「生活の真ん中に立つこと，教育学的関心を持って生きる人々（子ども，若者，大人）とともに働き，生活することによってもたらされる実践的な知恵（practical wisdom）の感覚をもつこと」(van Manen, 1984, p. 12）である。現象学者は，自身の人生経験が乏しけれ

ば乏しいほど，インタビュー，観察，遊び，対象との対話，ケーススタディ，参加型ワークへの参加など，広範で時間のかかるフィールドワークを通して，経験的理解を得る努力が求められる（cf. van Manen, 1984, p. 12）。

第二に，「現象学者は，広く深く読書をし，感性豊かな芸術家たちが根源的な真理体験の表現例を身をもって私たちに提供してくれる方法に飽くなき関心を持つことの価値」（van Manen, 1984, p.13）を追究することである。人生の解釈を豊かにするために，芸術，優れた小説や詩から，日常的な経験の範囲外にある経験や洞察，あるいは人間の人生に対するより深い洞察が得られることが期待されている。

c はすなわち，「現象学的省察」に取り組むことである。一般的に質的研究で想定されている分析方法は，フィールドノートの通読やコード化，カテゴリー化である。一方で，現象学的分析で鍵となるのは，テクストを基にした「現象学的省察」である。「現象学的省察」は，生きられた経験の中に網の目のように張り巡らされている単一の概念やカテゴリーを現象学的なテーマ（経験的構造）として捉えようとする省察である。とりわけ，ある現象を分析するとき，常に「その経験を構成する経験的構造が何であるか」（van Manen, 1984, p.20）と問うことが鍵となる。例として，既に文章化されている生きられた経験の記述をデータ・素材にしながら現象学的記述をすることが可能な現象のテーマ的側面や問いを発見するためのアプローチを取り上げよう。ヴァン＝マーネンは，ある生きられた経験に関するテクストを基に現象のテーマ的側面を明らかにするために二つのアプローチをとることができると提示している。一つ目は，「ハイライト・アプローチ（hilighting approach）」（van Manen, 1984, p. 21）である。このアプローチは，テクストを何度か聞いたり読んだりする中で，経験について本質的な記述がなされている箇所やフレーズに着目し，丸をつけたり，下線を引いたり，強調したりすることである。二つ目は，「一行ごとのアプローチ（line-by-line approach）」（van Manen, 1984, p. 21）である。これは，一文一文に目を通し，記述が経験についての何を明らかにしているのかと問うことで，記述の中にあるテーマを浮かび上がらせるアプローチである。これら二つの方法を用いながら，収集した様々な記述の中に，経験的なテーマの繰り返しや共通点，テーマの意味内容を捉えることによって，現象学的記述を構成していくための現象学的なテーマや問いと出会うことが促される。また，書き手自身の書いた生きられた経験を他者とともに読み開き議論することで，現象学的記述の主題となるテーマの決定が促される場合もあるとしている（cf. van Manen, 1984, pp. 21-24）。

d についてまとめるならば，「現象学的記述」[6] は研究と書くことに対して何の役にたっているのかという問いや，生きられた経験を構造的に明示するために「書くこと」と「書き直すこと」を現象学的記述のプロセスに据えることである。「現象学的方法は能力というよりはむしろ，感性が豊か（sensitive）であるという術（art）から構成されている。それは容易には気づかない言葉の含意に対する，あるいは，事柄それ自体が物語ることを許すときの言語的表明の方法に対する敏感さである」（van Manen, 1984, p. 24）とする主張においてヴァン＝マーネンは，「術（art）」を現象学的記述に位置付けている。というのも，現象学的方法は実質的に，「通常，我々の聴き慣れた範囲の外側へ抜け落ちてしまうような言語の深い調性（tonalities）を調和することができ，世界の事物が我々に語りかけてくるその方法に耳を傾けること」が要求されるためである（cf. van Manen, 1984, p. 24）。現象学的記述に取り組むことによって，生きられた経験の本質や現象の本質を構造的に成り立たせているものが可視化される。そうすることで，「現象の構造的特徴」を「物語」や「逸話的な素材」を駆使しながら現象学的に解明するような過程を経るように，表現を書き直すことが進められていくのである。

ヴァン＝マーネンが最後に提起する現象学的記述を構成していくための文章の種類として以下の五つの記述アプローチがある。それらは，①テーマ別（Thematically），②分析的（Analytically），③例示的（Examplicatively），④実存的（Existentially），⑤解釈的（Exegetically）アプローチである。①のテーマ別アプローチとは，テーマを中心として執筆をまとめることである。②の分析的アプローチとは，日常生活の一部と語源や慣用句，経験的記述や文学的・現象学的資料を調べながら分析的にテーマを浮かび上がらせることである。③の例示的アプローチとは，事例を体系的に変化させていくことによって現象の本質的な側面を浮かび上がらせることである。④の実存的アプローチとは，実存的テーマ（時間性，空間性，身体性，関係性）に対して現象学的記述を構成していくことである。⑤の解釈的アプローチとは，自身の文章と現象学的著者の思考と対話的に関与していこうとすることである。この五つの提案は，扱う現象の性質の観点から決定されるとされ（cf. van Manen, 1984, pp. 26-27），書き手は，各レベルの間を行き来しながら書くことと書き直すことを進めていくことができるとされる。

このように，ヴァン＝マーネンは現象学的記述に取り組むための現象学的なテーマや問いを生きられた経験やその記述から発見し，そのテーマや問いをもって現象学的記述を「書くこと」と「書き直すこと」に

ついて言及している。ヴァン＝マーネンは，文章表現を改善するために「書くこと」と「書き直すこと」を位置付けているという以上に，現象学的記述を試みることが可能なテーマや問いに出会い，実際に生活世界を現象学的に記述しようと「書くこと」と「書き直す」営みの中にこそ，生きられた経験の経験構造や本質を捉える試みがあること，ならびに，生活世界における書き手自身の存在，引いては他者の存在を把握することの契機があることを示しているといえよう。

Ⅳ．「事例の科学」としての現象学的記述の特質

「記述する（décrire）ことが問題であって，説明したり（expliquer）分析したり（analyser）することは問題ではない」（メルロ＝ポンティ1967，３頁）というように，現象学の文脈において，記述するということに関するメルロ＝ポンティの一文は記述することと世界を捉えること，そして記述することと科学の関係を端的に言い表している。世界は説明や分析に先だって存在しているため，世界の現実をどのように記述するかが問題であるという前提に現象学が立つためである（メルロ＝ポンティ1967，６頁参照）。ゆえに，「科学とはこの世界経験の二次的な表現でしかない」（メルロ＝ポンティ1967，４頁）のであって，「一切の科学的規定は，この世界にたいしては抽象的・記号的・従属的」（メルロ＝ポンティ1867，４頁）でしかないということになる。

現象学的記述に対する位置づけには，現象学者の「科学」に対する立場が現われることを前提として，M・ヴァン＝マーネンらは現象学的研究を「事例の科学」として捉えている。ヴァン＝マーネンらは，「現象学を遂行すること」と現象学における「記述」の関係性をどのように考察しているかを見てみよう。二人は次のように指摘している。「現象に関して現象学を遂行することは，われわれが現象を概念化したり理論化したりするということよりもむしろ，われわれが現象を生きるように世界の物事に関して直接的に理解することであり，注意深く意識を向けるよう実践するような態度を引き受けることである。直接記述とは，もともとの生きられた経験の意味，あるいは無意識の経験（意識の中に，あるいは意識として与えられた原初的な現象や出来事）の意味を，まっすぐに意味づけることである」（van Manen, Mi., & van Manen, M., 2021, p. 1071）

M・ヴァン＝マーネンらは，理論化や概念化の以前に，人々がすでに生きている世界に目を向けること，そして，生きられた経験を意味づけるために「現象学を遂行すること」に意味を見いだそうとしているのである。言い換えれば，生きられた経験の意味を意味づけることを原動力として営まれるのが「事例の科学」としての「現象学を遂行すること」である。

M・ヴァン＝マーネンらの考える現象学的記述においては，「例」の使用は現象そのものに焦点を当てた現象学的記述の明確な特徴であると捉えられている（cf. van Manen, Mi., & van Manen, M., 2021, p. 1077）。すなわち，現象学的記述において「例」の与えるレトリックは，実際にどのような生きられた経験がなされているのかに一定の現実性，妥当性を提示するために用いられるのである。

「『現象学的な例』は，そのような説明的，明示的，あるいは例示的な例の使用とは根本的に異なることを認識することが重要である。現象学的な『例』の概念は，方法論的には現象学的な探究のための独特で記号的な図式である。現象学のテクストにおける例が証拠的となる意味を与えるのは，その例が，直接的には表現できないが経験的に知りうる，あるいは理解しうる何か，すなわち普遍的な特異性の例であるからである。」（van Manen, Mi., & van Manen, M., 2021, p. 1080）この指摘でもって，ヴァン＝マーネンらは，ある一つの個別的事例を用いる考察の進め方の特徴と役割は，経験を単にそのまま記述するだけではなく，特異的で典型的な事象から現象の本質に近づくことだと提示している。それによって，「現象学を遂行すること」という態度とそのプロジェクトに対し，生きられた経験の事例からその意味の本質へアクセスするという「事例の科学」としての現象学的記述の可能性を見出すことで，現象学的方法論の展開を切り拓こうとしているのである。

Ⅴ．研究の成果と課題

本論稿では，ヴァン＝マーネンの解釈学的現象学の理論的展開を俯瞰したうえで，「現象学を遂行すること」が単に経験を説明するだけではなく，経験の本質に接近するための「事例の科学」という構想として展開していることを示してきた。その上で得られた成果は以下の二点にまとめられる。

第一に，ヴァン＝マーネンの理論の展開と現象学的研究の背景には，非哲学者であっても現象学的研究にアクセス可能になるための研究方法論の精緻化への問いが一貫して存在するということである。その問いを追究し現象学的記述に取り組む初学者として大学院生や教育者を想定することで，彼／彼女らと共に練られてきたのがヴァン＝マーネンの「現象学を遂行すること」の構想であった。この点は，北米のカリキュラム研究の中で，ヴァン＝マーネンの現象学的教育学の取り組みを位置付けたPinar, et. al.（1995）にお

いても評価されていた点である（藤原2024参照）。パイナーらは，現象学的な研究は，美的で詩的な表現を用いることを認めるが，現象学自体が理解しがたいものではないとし，中でも van Manen（1984）の示す現象学的な研究のアウトラインは，現象学的なカリキュラム研究の理解をしたいと思う初学者にとって有用であることを示している（cf. Pinar,et. al., 1995, p. 409）。ヴァン＝マーネンの現象学的教育学的な研究方法論の意義は，現象学的な見方をもって教育学研究やカリキュラム研究をすすめたい研究初学者を誘う地図を提供していることであるといえる。

第二に，経験を書くことと書き直すことという「現象学を遂行すること」を通した「事例の科学」という構想を描きだしたことである。近年の研究展開を考慮すれば，「ヴァン＝マーネンの構想」として一枚岩で語ることに留意がいるものの，大学院の演習で使用されたハンドアウトでは，生きられた経験の記述から現象学的なテーマや問いを発見し，テーマや問いを軸に現象学的記述を書くことと書き直すことを進めていくこと，さらに，現象学的記述が様々な例によって構成され，現象学記述自体が生きられた経験の本質や構造を解明するような「事例」として機能するという位置づけがされていた。「事例」は，論理的説明的な表現を乗り越えるための仕掛けとして機能していることが意図されていたのである。研究と書くことを往還する取り組みにおいては，書き手自らの経験に対する問いを研究の問いへとつないでいく過程や，まだ言葉になっていなかった「事柄それ自体」あるいは「経験それ自体」を言語的表現へ置換する中で，誰かの視点で見た経験についての考察をする以上に，経験そのものから現象学的なテーマを抽出し，そのテーマや経験それ自体が人間にとってどのような意味を持つものなのか，という考察をすることが「事例の科学」としての現象学的研究方法論の基盤的構想にあるといえよう（cf. van Manen, 1984, p. 18）。この点において，現象学的方法論は他の研究方法論とは異なり，経験への現象学的なテーマや問いを導き出す過程に重点を置き，現象学的記述はテーマや問いを反芻しながら省察的に進められていく。

これらの研究成果から導き出される研究の課題は，次の二点のような研究と実践との間の課題として提起される。一点目は，本論文の成果から導き出される二点目の成果に対する課題である。ヴァン＝マーネンの「事例の科学」としての現象学的研究方法論の基盤的構想には，「経験として知っていることは言葉にできる」という前提があることが伺える。一方で，例えばグリーフケアのように，「死」という未知なものや理解不能なこと対しては，言葉にするには多大な時間を要したり，思い通りに経験が言葉にできず経験を抱え込んでしまう場合が想定できよう。言葉にすること自体への抵抗や未知なる経験を語るということについて，現象学的教育学の知見からだけではなく現象学の分野のなかでの議論を参照しながら引き続き検討する必要がある。二点目は，現象学的方法論においては，時に他者の経験をもとに経験について考察することが含まれるが，「他者の経験を記述するとはどういうことか」という論点をもとに検討する余地がある。例えば，インタビューを想定し「他者の経験を記述すること」を考えた場合，そもそも語られたことがインタビュアーの影響や誘導が働き「語ってくれた」ものになっていないか，ここでは「語ってはいけない」「語りにくい」というように語り手の経験が語る語彙から抜け落ちるような状況を生み出していないか，インタビューを行ったあとの文字起こしの記録は他者の経験を記述したものにあたるのかということが吟味される必要がある。

【註】

1）田端（2017）は，「現象学をすること（doing phenomenlogy）」について，小説家や画家たちも現象学をしているというメルロ＝ポンティの指摘を引きながら，「私たちは，現象学の哲学書を読んでいようといまいと，同じような驚きをもちながら，同じような注意や意識の厳密さをもって，『世界の歴史の意味』をそれが『生れ出づる状態』で捉えようと活動するとき，現象学をしている（doing phenomenology）ということになる」（田端2017，163頁）とする。ここでの遂行の主体として想定されているのは，原初的な経験への注意や意識を向け活動する主体である。一方，ヴァン＝マーネンの想定する「現象学を遂行する」主体は，大学生や大学院生ならびに心理学，教育学，看護学，医学といった臨床的な対人支援を専門とする専門職に限定して想定されている（cf. van Manen, Mi., & van Manen, M., p.1071）。

2）この資料はインターネット等では入手できない資料であり，先行研究でも検討対象とされてこなかった資料である。

3）村井（2003）によれば，ランゲフェルトの弟子であり後継者であるベークマンは，ユトレヒト学派が1950年代末にはその影響力が枯渇したという主張に反論を唱え，「新ユトレヒト学派」を名乗ったユトレヒト学派の第二世代に位置づく人物である（村井2003，444頁参照）。なお，以降の「第三世代」という位置づけは，村井（2003）を参照している。

4）教育学文脈におけるヴァン＝マーネンの理論につ

いては，彼の研究活動の全体像や方法論の検討がなされてきたというよりは，とりわけ，教育的タクトの形成や実践的省察の構造，後述するユトレヒト学派とのつながりに焦点化した着目がなされてきた（例えば中野2002；宮原2012；吉永2021；村井2022）。

5）「Phenomenology Online」という，ヴァン＝マーネンがアルバータ大学のインターネットサイト上に構築したサイトの情報に基づいている（phenomenologyonline.com）。ただし2024年７月10日時点で，同サイトは確認できない。そのためこの情報は，2021年１月21日時点で筆者がHPの「経歴」ページ情報を保存したデータに基づいて整理した。

6）「現象学的記述」とは，生きられた経験の記述とは区別される。「生きられた経験の記述は現象学的記述ではない」（ヴァン＝マーネン2011，93頁）とするのも，生きられた経験の記述は，経験に対する一次的な「データ」あるいは「素材」であり，書き手と経験した者が一致する記述である。一方，現象学的記述は生きられた経験の意味を明らかにするために，逸話，インタビュー，日記・日誌等の生きられた経験を用いながら，生きられた経験自体の意味や解釈が深まるような二次的な表現段階のことである。

【引用参考文献】

マックス・ヴァン＝マーネン／村井尚子訳（2011）『生きられた経験の探究－人間科学がひらく感受性豊かな＜教育＞の世界－』ゆみる出版。

メルロ＝ポンティ／竹内芳郎・小木貞孝共訳（1967）『知覚の現象学Ⅰ』みすず書房。

井谷信彦（2013）「タクトの啓発と『ありうること』への開放－ヴァン＝マーネンの省察理論と意味生成の沃野－」『武庫川女子大学大学院教育学研究論集』第８号，1-8頁。

奥井遼（2017）「『ユトレヒト学派』の現象学的教育学再考」宮城教育大学学校教育講座教育学研究室編『学ぶと教えるの現象学研究』第17巻，74-84頁。

田端健人（2014）「第３節　現象学的アプローチ」日本教育方法学会編『教育方法学研究ハンドブック』学文社，78-81頁。

田端健人（2017）「現象学と臨床教育学－科学技術への新たな架け橋」矢野智司・西平直編『臨床教育学』（教職教養講座　第３巻）協同出版，161-182頁。

中野和光（2002）「マーネン（Max van Manen）の教育的タクト論に関する一考察」『九州教育学会紀要』第30巻，27-43頁。

浜口順子（2021）「子どもの生活世界の現象学的探究－ユトレヒト学派臨床的教育学の意義に関する一考察－」お茶の水女子大学『幼児の教育』編集委員会編『幼児の教育』フレーベル館，52-62頁。

藤原由佳（2024）「北米における現象学的教育学がカリキュラムの再概念化運動にもたらした示唆－現象学的教育学の視点からカリキュラム研究へ投げかけられる問いに着目して－」中国四国教育学会編『教育学研究ジャーナル』第30号（印刷中）。

宮原順寛（2012）「現象学的教育学における教育的タクト論の展開」『学校臨床心理学研究：北海道教育大学大学院教育学研究科学校臨床心理学専攻研究紀要』第９巻，19-31頁。

村井尚子（2003）「第13章　ユトレヒト学派の現象学－現象学的心理学から現象学的教育学へ－」山崎高哉編『応答する教育哲学』ナカニシヤ出版，432-449頁。

村井尚子（2008）「『子どもという人間』への理解（1）－トン・ベークマンの現象学的教育学－」『大阪樟蔭女子大学学術研究会人間科学研究紀要』第7号，163-178頁。

村井尚子（2012）「『子どもという人間』への理解（2）－現象学的記述の分析－」『大阪樟蔭女子大学研究紀要』第２巻，73-83頁。

村井尚子（2022）『ヴァン＝マーネンの教育学』ナカニシヤ出版。

吉永紀子（2021）「実践的省察を通した教師の＜子ども理解＞の更新－観の編み直しの契機につながる省察に着目して－」『教育方法の探究』24巻，31-38頁。

Levering, B., & van Manen, M. (2002). Phenomenological Anthropology in the Netherlands and Flanders. In Tymieniecka, A.-T. (Ed.), *Phenomenology World-Wide* (pp. 274–286). Kluwer Press.

van Manen, M. (1984). “Doing” Phenomenological Research and Writing: An Introduction. *Curriculum praxis monograph series,* **7**. 1-29.

van Manen, M. (1990). *Researching Lived Experience: Human Science for an Action Sensitive Pedagogy.* Routledge.

van Manen, M. (2014). *Phenomenology of Practice: Meaning-Giving Methods in Phenomenological Research and Writing* (1st ed.). Routledge.

van Manen, Mi., & van Manen, M. (2021). Doing Phenomenological Research and Writing. *Qualitative Health Research,* **31**(6), 1069-1082.

Pinar, W., Reynolds, W., Slattery, P., & Taubman, P. (1995). Understanding curriculum as a phenomenological text. In *Understanding Curriculum: An Introduction to the Study of Historical and Contemporary Curriculum Discourses* (pp.404-449). Peter Lang.

（主指導教員　吉田成章）